多賀小

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成

～数学的な見方・考え方を身に付けさせる指導を通して～

（３年計画の３年次）

校長名　　福士　良樹

１　研究主題について

本校では、教育目標「夢や志をもち、共に高め合う児童の育成」を掲げ、それを受けて努力目標を「考える子・やさしい子・すこやかな子」としている。また、めざす児童像を「主体的に学び合い考えを深める子・素直な心をもち自他を大切にする子・健康な生活を送り心身ともにたくましい子」とし、知育・徳育・体育の各部会が具体策を提案し、職員全体の共通理解の下、知・徳・体の調和のとれた児童の育成を図っている。

昨年度は、単元を通しての児童の「ゴールの姿」を明確にし、導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりに取り組んだ。また、学び合いの場においての手立てとして、話合いの視点を明確にすることにも取り組んだ。

その結果、それぞれの時間に押さえるべき重点項目を俯瞰した指導が継続され、子どもたちに「数学的な見方・考え方」を身に付けさせることができた。また、課題解決へ向けた学び合いを促すために、グループやペアで説明する場を設定することが有効であることが確かめられた。

しかし、「共に学び合う具体的な姿」について共通理解できたものの、まだ一部の児童の発言に頼って授業が進んでいく場面が見られ、児童同士がよりよい課題解決に向けて話し合い、深い学びができるような授業展開を工夫していく必要性が挙げられた。また、主体的な学びの土台である各学年の基礎基本を身に付けさせるために、系統性を意識した教材研究や算数的表現力を育成することの必要性も挙げられた。

そこで今年度は、既習を活用する場面を研究授業に設定し、話合いの根拠となる材料を蓄積しながら授業づくりに励むこととした。そのために、単元や題材に関わる知識・技能、見方・考え方の明確化と整理をし、効果的な学び方に関する認知をしていく。また、発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、振り返りのさせ方を工夫したりしながら、説明する力や伝え合う力を伸ばす手立てについて研究を進めて行く。また、これまで取り組んできた導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、本校の課題を解決していく。授業研究での成果を日常の授業実践に生かし、進んで考えを伝え合い、共に学び合う子の育成に努めていきたい。

２　研究のねらい

進んで考えを伝え合い、共に学び合う子を育成するための学習指導の在り方を、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、振り返りのさせ方を工夫したりしながら、説明する力や伝え合う力を伸ばす手立てについて研究を進めることにより、「進んで伝え合い、共に学び合う子」の育成につながると考える。

４　研究内容

(1) 主体的な伝え合い・学び合いを支える手立てや工夫
　ア 発言をつなげるための話型やつなぎ言葉の提示
　イ 式や図の活用
　ウ 視点をもたせた振り返りのさせ方(ノート、発表など)

(2) 導入・課題提示の工夫

(3) 特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり
　ア ねらいや意図に添った視覚化、共有化、焦点化
　イ 活動時間の区切り、パターン化

５　研究の経過

(1) 研究仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
6	３０	第１回授業研究（２学年）　授業者　石塚　里佳　「図を使って考えよう（1）」
9	8	第２回授業研究（３学年）　授業者　髙橋　祥子　「あまりのあるわり算」
１１	２４	第３回授業研究（５学年）　授業者　蟹沢　歩美　「割合」

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
9	１５	１人１台端末活用研修 講師：八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三　氏
１０	1	ジャムボードの活用、学級経営について 講師：八戸市立小中野小学校　教諭　佐々木　亮輔　氏
3	2	教職人生を振り返って（仮） 講師：八戸市立多賀小学校　校長　福士　良樹

６　研究の成果

(1) 発言をつなげるための話型やつなぎ言葉を提示したり、話合いの際に手元にカードをもたせたりすることは、話すことが苦手な児童にとって有効な手立てとなった。また、単元ごとに話合いの根拠となる材料を蓄積し、それを使って説明する時間を設定することで、進んで伝え合う力が育ってきた。

(2) 導入・課題提示の工夫や特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりを継続することによって、児童に問いをもたせたり、必要感をもって課題に取り組ませることができた。

(3) １人１台端末活用についての研修を継続することで、日常の指導に生かしたり、今後の授業で活用したりするための基礎を学ぶことができた。

７　研究の課題

(1) よりよい課題解決に向けてペアやグループで学び合う姿が見られる一方、課題把握の場面でのつまずきや自力解決での個人差により、伝え合いに時間が多くかかって学び合いがうまく進まないという実態が明らかになった。個に応じた指導を、よりよい学び合いにつなげられるよう研究を深めていく必要がある。

(2) 学習内容や方法、次時や他教科とのつながり、友達とのかかわりなどの視点をもたせた学習の振り返りについて研究が不足していた。ねらいや課題と整合した振り返りのさせ方や、そのための十分な時間の確保について実践と検証が必要である。

（記入者　石塚　里佳）